

九州大学 正会員 山崎 徳世
 " " " 櫻木 武

1 緒言 連続はりよびラーメンの自由振動解析には、微分方程式の直接解に基づく方法と振動接角法の方法が最も広く利用され、数式内取扱いも簡明であるが、これら幾何解法でははり板ははりよびで構成される一体構造の振動解析に適用することは不可能である。本研究は直交関数展開式を用いて連続はりよびラーメンの曲げの自由振動問題の解法を提示するとともに、板-はり一体構造の振動解析における基礎理論に資せんとするものである。

2 直交関数展開公式 本研究で使用する直交関数ははりの曲げの自由振動の微分方程式に

由来する特性関数であり、表-1に示すごとく種類があるが、これらはいずれも直交条件の他に式(1)を満足する。

$$d^4 \zeta_n(\xi) / d\xi^4 = \delta_n^4 \zeta_n(\xi) \quad (1)$$

また、 $\zeta_n(\xi)$ によりさらに定義された任意関数 $f(\xi)$ の展開公式は次のごとくである。

$$f(\xi) = \sum_{n=1}^{\infty} a_n \zeta_n(\xi) \quad (2)$$

$$\therefore a_n = \frac{1}{\delta_n^4} \int_0^1 f(\xi) \zeta_n(\xi) d\xi$$

($n > 2$, Case(1)では $T_n^2 = 1/2$, Case(7)では $T_n^2 = 1$ であり、他のCaseは表-1に示すとおりである)

3 解法 (1) 基準関数 図-1(a)に示すラーメンにおいて、直列に剛結した一連のはりよびで構成される部材列ABは、両端A, Bの他に中間の m 本の柱 ($j=2, \dots, m$) に支持されている。ラーメンが振動すれば、各中間支柱に垂直反力 R_j および反力モーメント M_j' が生ずるが(図-1(b)参照)、これらはいずれも部材列ABの振動変位を拘束する一種の強制力とみなすことができる。一般に中間支柱の座標値 x と時間 t の関数で与えられる $p(x, t)$ と書き表わせば、本題の部材列ABの自由振動の微分方程式ははりの強制振動の微分方程式と同じ形式で与えられることとなる。

$$EI \frac{\partial^4 y}{\partial x^4} + \rho \frac{\partial^2 y}{\partial t^2} = p(x, t) \quad (3)$$

\therefore に、EI: 部材列ABの曲げ剛性、 ρ : 部材列ABの単位長さ当りの質量、 y : 部材列ABのたわみ式(1)の一般解はその斉次方程式から与えられる余関数 y_1 と特解 y_2 との和で与えられるが、余関数は既知の n とく n 次式で表わされる。

$$y_1 = (A \cosh \lambda \xi + B \sinh \lambda \xi + C \cos \lambda \xi + D \sin \lambda \xi) \sin(\omega t + \epsilon) \quad (4)$$

\therefore に $\lambda = l \sqrt{\rho \omega^2 / EI}$, $\xi = x/l$, ω 固有円振動数、 ϵ 初期位相角、 A, D 積分定数

Case	特性方程式	特性関数(任意関数)
(1)	$\sin \delta = 0$	$\zeta_n(\xi) = \sin n \pi \xi$
(2)	$\cosh \delta \cos \delta + 1 = 0$	$\zeta_n(\xi) = T_n (\cosh n \xi - \cos n \xi) - T_n (\sinh n \xi - \sin n \xi)$ $\therefore T_n = 1 / (\cosh n \xi + \cos n \xi)$, $\delta_n = 1 / (\sinh n \xi + \sin n \xi)$
(3)	$\cosh \delta \cos \delta - 1 = 0$	$\zeta_n(\xi) = T_n (\cosh n \xi + \cos n \xi) - T_n (\sinh n \xi + \sin n \xi)$ $\therefore T_n = 1 / (\cosh n \xi - \cos n \xi)$, $\delta_n = 1 / (\sinh n \xi - \sin n \xi)$
(4)	$\cosh \delta \cos \delta - 1 = 0$	$\zeta_n(\xi) = T_n (\cosh n \xi - \cos n \xi) - T_n (\sinh n \xi - \sin n \xi)$ $\therefore T_n = 1 / (\cosh n \xi - \cos n \xi)$, $\delta_n = 1 / (\sinh n \xi - \sin n \xi)$
(5)	$\cosh \delta \cos \delta - 1 = 0$	$\zeta_n(\xi) = T_n (\cosh n \xi + \cos n \xi) - T_n (\sinh n \xi + \sin n \xi)$ $\therefore T_n = 1 / (\cosh n \xi + \cos n \xi)$, $\delta_n = 1 / (\sinh n \xi + \sin n \xi)$
(6)	$\tanh \delta = \tan \delta$	$\zeta_n(\xi) = T_n (\cosh n \xi - \cos n \xi) - T_n (\sinh n \xi - \sin n \xi)$ $\therefore T_n = 1 / (\cosh n \xi - \cos n \xi)$, $\delta_n = 1 / (\sinh n \xi - \sin n \xi)$
(7)	$\tanh \delta = \tan \delta$	$\zeta_n(\xi) = T_n (\sinh n \xi - \sin n \xi)$ $\therefore T_n = 1 / \sinh n \xi$, $\delta_n = 1 / \sin n \xi$

表-1 直交関数 $\zeta_n(\xi)$ の特性方程式の1次の特根である。

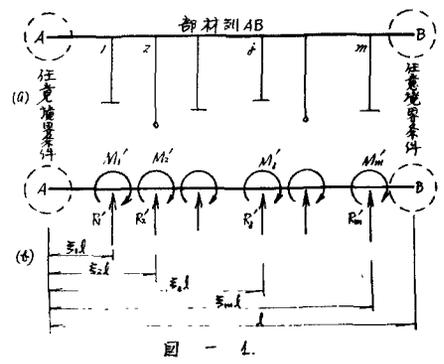


図-1

特殊解 \$y_p\$ は次のごとく求められる。中間支柱の垂直反力 \$R_j\$ および反力モーメント \$M_j\$ は、それぞれとも同様の関数 \$a\$ の周期関数であり次式のごとく表わされる。

$$R_j' = R_j \sin(\omega t + \varepsilon), \quad M_j' = M_j \sin(\omega t + \varepsilon) \quad (\text{ここで, } R_j: \text{最大反力, } M_j: \text{最大反力モーメント}) \quad (5)$$

式(5)の \$R_j\$ および \$M_j\$ を式(2)の展開係数を用いた変関数系 \$Z_n(\xi)\$ にて展開すれば次式が成り立つ。

$$\{R_j'\} = \frac{R_j}{l} \sum_{n=1}^{\infty} \frac{1}{T_n} Z_n(\xi) \sin(\omega t + \varepsilon), \quad \{M_j'\} = -\frac{M_j}{l} \sum_{n=1}^{\infty} \frac{1}{T_n} Z_n(\xi) \sin(\omega t + \varepsilon) \quad (6)$$

ここに \$\{ \}\$ は \$Z_n(\xi)\$ による展開式を意味し、\$[FL]^n\$ 次元である。

\$j\$ について、式(6)の総和を求めれば、部材列 \$AB\$ に作用する全強制力 \$p(x, t)\$ が与えられ、次式のごとく算定される。

$$p(x, t) = -\sum_{n=1}^{\infty} \frac{\omega}{T_n} \{R_j Z_n(\xi) - \frac{M_j}{l} Z_n(\xi)\} Z_n(\xi) \sin(\omega t + \varepsilon) \quad (7)$$

他方、式(7)の平衡数 \$f_n\$ を判別して、特殊解 \$y\$ を直交関数系展開式で表わし、次式のごとく仮定する。

$$y_n = \frac{G_n}{T_n} Z_n(\xi) \sin(\omega t + \varepsilon) \quad (\text{ここで, } G_n: \text{任意定数}) \quad (8)$$

式(7)および式(8)を式(3)に代入し、かつ \$Z_n(\xi)\$ に関する式(1)の固有式を考慮すれば、式(8)の任意定数 \$G_n\$ が次式のごとくえられる。

$$G_n = -\frac{l}{EI} \frac{\sum_{j=1}^m R_j Z_n(\xi_j) - (M_j/l) Z_n(\xi_j)}{T_n^2 (T_n^4 - \lambda^2)} \quad (9)$$

式(8)を式(3)に代入すれば特殊解 \$y_p\$ が求まり、さらに式(9)の全関数 \$y_p\$ と加え合せた式(3)の一般解は下記の部材列 \$AB\$ の標準関数 \$Y\$ が次のごとく算定されることとなる。

$$Y = A \cosh \lambda \xi + B \sinh \lambda \xi + C \cos \lambda \xi + D \sin \lambda \xi + \sum_{n=1}^{\infty} \frac{R_j Z_n(\xi_j) + M_j Z_n(\xi_j)}{T_n^2 (T_n^4 - \lambda^2)} Z_n(\xi) \quad (10)$$

$$\text{ここで, } R_j = -\frac{l}{EI} R_j, \quad M_j = \frac{l}{EI} M_j$$

以上の前論では、境界条件にて \$A \sim D\$ を決定する際に、部材列 \$AB\$ の両端に働く端モーメント (\$M_0, M_{mm}\$) を考慮する必要がある。文献(1)に示すごとく、中間支柱の垂直反力および反力モーメントと同じく部材列 \$AB\$ に作用する荷重とみだして処理することも可能であり、かつこの場合に標準関数 \$Z_n\$ が次式のごとく与えられる。

$$Y = A \cosh \lambda \xi + B \sinh \lambda \xi + C \cos \lambda \xi + D \sin \lambda \xi + \frac{\sum_{j=1}^m R_j Z_n(\xi_j) + \sum_{j=1}^m M_j Z_n(\xi_j)}{T_n^2 (T_n^4 - \lambda^2)} Z_n(\xi) \quad (10')$$

すなわち、式(10)および式(10')において、\$M_j\$ の項を除き、部材列の中間に垂直反力のみが生ずることと構造するならば連続梁の標準関数となる。

(2) 振動数方程式 式(10)に含まれる未知数 \$A, B, C, D, R_j, M_j\$ および \$\lambda\$ は、部材列 \$AB\$ の境界条件および中間支柱位置における部材列 \$AB\$ の連続条件から求まる。端部の境界条件は同知のごとく \$E \sim G\$、固定、自由および柱の4種類あり、これらが直ちに組合して下記それぞれの Case により異なる境界条件式はさうだが、その全てを列挙することは断面の都合上不可能であるので、本文では最も多様性のある次のごとく境界条件を例にとりて以下論ずることとする。

$$\xi=0: \quad Y=d_0, \quad d^2 Y/d\xi^2 = -M_0, \quad \xi=l: \quad Y=d_{m+1}, \quad d^2 Y/d\xi^2 = M_{m+1} \quad (11)$$

両端の任意変位 \$d_0\$ が作用する垂直反力に比例する \$d_0\$ の \$i\$、その比例定数を \$Y_0\$ とすれば、\$d_0, d_{m+1}\$ は次式のごとく表わされる。

$$d_0 = -\frac{EI}{l^2} Y_0 R_0, \quad d_{m+1} = -\frac{EI}{l^2} Y_{m+1} R_{m+1} \quad (12)$$

境界条件を考慮した部材列 \$AB\$ に作用する力およびモーメントの釣合条件より、両端 \$A, B\$ の垂直反力 \$R_0, R_{m+1}\$ を算出するに式(12)に代入して与えられる結果と式(11)とを式(10)に代入すれば次のごとく連立方程式が成り立つ。

$$\begin{Bmatrix} (W_0)_{d_0} & ; & (H_0)_{d_0} & ; & (G_0)_{d_0} & ; & (D)_{d_0} \\ \vdots & & \vdots & & \vdots & & \vdots \end{Bmatrix} \cdot X = 0 \quad (13)$$

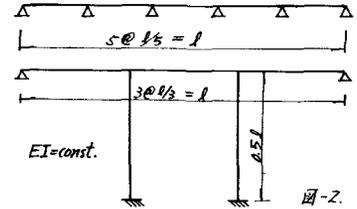
ここで \$X = [A, B, C, D, R_0, R_1, \dots, R_j, \dots, R_m, M_0, M_1, M_2, \dots, M_j, \dots, M_m, M_{m+1}, \Delta]^T\$、\$\Delta\$: 部材列 \$AB\$ の水平変位

を求めた後の基本連立方程式をうるが、定数項は1つだけ0である。したがって、解が存在するものに1つ連立方程式の係数行列が0とならなければならぬことより、図-1(a)のラメシに於ける振動方程式が次のごとく導定されることとなる。

$$\begin{vmatrix} (W_0)_{44} & (H_0)_{4m} & (G_0)_{4(m+2)} & (0)_4 \\ (W_0)_{m4} & (H_0)_{mm} & (G_0)_{m(m+2)} & (0)_m \\ (W_0)_{(m+2)4} & (H_0)_{(m+2)m} & (G_0)_{(m+2)(m+2)} & (0)_{m+2} \\ \{0\}_4 & \{0\}_m & \{\Lambda_0\}_{m+2} & \sum_{i=1}^m \pi_i \end{vmatrix} = 0 \quad (9)$$

当然ながら、式(9)左辺において Δ の値および右方程式に由来する項のためら最後の行と列とを除去すれば、節点移動の自由ラメシの振動方程式がえられ、さらに、 $M_1 \sim M_m$ の値および式(16)の第2式に由来する項を除去すれば連続体ばりの振動方程式がえられる。

4 計算例 図-2に示すスパン連続体ばりおよび3スパンラメシの固有値を求めれば表-2のごとくえられる。また、連続体ばりのモードを描けば図-3のごとくである。



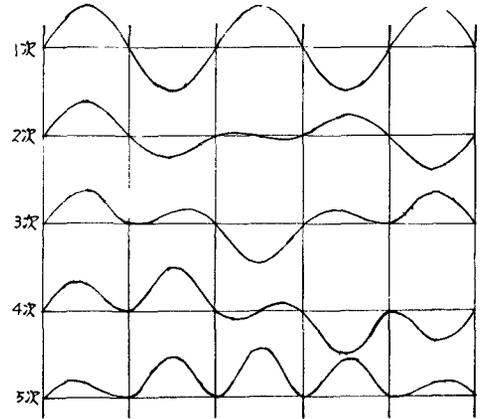
5 結論 本論文で式(10)の規準関数 χ を用いて式(9)の振動方程式を求めたが、式(10)によつて諸算可能であり、次の場合に端モーメント M_0, M_{m+1} を任意とみなすことができ、境界条件式に於ける M_0, M_{m+1} が消失する。直交関数 $\chi_n(x)$ は表-1に示すものを採用してよしか、特に $\chi_n(x)$ の導定時におけるばりの境界条件と節点列ABの境界条件とが一致する場合に於て、式(9)の左辺における $(H_0)_{4m}$ および $(G_0)_{4(m+2)}$ の行列要素が1つだけ0となり、計算が著しく簡略化される。本研究は連続体ばりおよび3スパンラメシの自由振動問題の解法を提示したものであるが、3スパンラメシについても拡張応用が可能である。また、1に述べたごとく、本法は板力連続体ばりラメシに2弾性支持されるごとく板-はり一体構造の振動解析における基礎理論とありうる実、および無梁板解析の手掛りとならう実、その他の幾何学解法に類をなす特色をもちたい。

表-2 固有値入

n	5スパン連続体ばり	3スパンラメシ
1	15.7080	4.3775
2	16.5454	7.3946
3	18.5022	7.5140
4	20.7655	10.4709
5	22.7537	10.5254

1) 山崎 博志 フーリエ級数による連続体ばりおよびラメシの解法、九州大学工学集報 第39巻第3号 昭和41年10月

2) 小野 重、振動解析法とその実用化、建築学会大会論文集 昭和42年3月



(参考文献)